
アリアドネの糸 【交錯】

小島 鉄平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリアドネの系 【交錯】

【Nコード】

N1437X

【作者名】

小島 鉄平

【あらすじ】

「現実」と「仮想」がひとつに!?

そんな決しておきるはずのない現象が発生していることもわからず関東各地で発生しているこの建造物連続破壊事件に高校生天才ゲーマー、桐ヶ谷一真が挑む!そして、一真が見たこのなぞの真実とは!?

そして、この事件を期に一真のその周辺のただの日常が侵食されていっていた。「アリアドネの系」シリーズ第一弾!

ノンストップ!ファンタジーバトルミステリー、ついに始まる!

「狩りさせてもらおうか」「この謎の悪意を・・・」

STAGE 0

その部屋の中にはゲームのBGM音と敵を攻撃したときの効果音だけが響いていた。戦っているボスと自分が操作しているプレイヤーの体力ゲージがいよいよレッドゾーンに割り切ったところで敵の動きが急に早くなってきた。こっちだって負けてられるかと敵のテナポに合わせる。

そして敵の後ろに回りこんだ瞬間、がら空きの背中にたたきつけた。ボスのHPゲージがレッドゾーンからブラックゾーンへ、そして、HPを1ドット残さず削りきった。爆発のエフェクトともにボスが消滅しオートセーブされそれが終わった後、電源を切った後小学生ぐらいの少年が机の上にゲーム機を置き、そばにあるベッドに飛び込んだ。そしてその後すぐに睡魔が襲い、まぶたを閉じ、睡眠に……。

ゲームが勝手に起動しているのも知らずに。

STAGE 1

俺の目の前ではセイバーをメイン装備とする主人公（つまり俺が操作しているキャラ）が2Dステージのダンジョンを次々とこなし、進んでいた。

時間差で発生する海底火山から噴出すマグマや、無数に発生する湧出なんてものも、俺が操作すりゃあ、あっても「無い」に等しい。こっちは1000をもゲームを完全クリアし尚且つ、およそ5000をも超えるダンジョンをクリアした猛者である。俺から見ればこんなのイージーモード以下だ。

さて、こんなダンジョンの批評はここまでにしておいて、なぜ俺がこんな簡単なゲームを続けているのかというと、とりあえずボス戦がとても楽しいことに尽きる。PMP（pray mind portable）発売されて以来の大作である（ボス戦だけは）。しかし簡単というだけあって、とりあえずダンジョンが理屈抜きで長い！簡単ならば丈を長くしちまえなんて発想だろう。なんてクレイジーな開発者だ。だったらもう少し難易度を上げたらいいものを……。

さてどうこうしている間にも、もうこの部隊を指揮するリーダー、つまりこのステージのボスの部屋の前までたどり着いた。俺はPMPをおき、両手の五指の間接すべてを鳴らし、その後くせのある前髪を手ぐしで解いてからもう一度PMPを持ち上げ姿勢を良くして、ボスがいるであろう部屋に入った。入った瞬間、さっきまで流れていたダンジョンのBGNが消え、重々しく暗めのイメージを持たせるBGMが流れていった。戦う場所は海中。ダッシュが遅くなるが、ジャンプ力が異常なぐらい高くなる。

さて、ユートロイド（このゲームで登場するすべてのボスの総称）にもタイプがある。それは「うっとおしいやつ」と「激へばなやつ」と「めんどくさいやつ」の3つのタイプだ。ここでもし魚型のユ-

トロイドなら大歓迎しよう。ただし、イカやらタコやらの軟体動物をモチーフとしたユートロイドなら本当に門前払いしたくなる。長期戦必至な上、体力は高いわ攻撃のリーチは長すぎるわだの、めんどくさい3大要素がそろってしまふ。

だから俺はそうならないように祈っておく。

そして……………

「うわっ……………」

俺は思わず絶句した。魚型なのはいいとしよう。なんだよこのHPは！5段階目のブラックゲージとか、序盤にしてはあまりにも高すぎるだろ！初見殺しも程々にしろ！小学生泣いちゃうぞ！がんばれ、小学生！俺は負けないからな！

などという、戯言はさておき。相手がこんなにもHPが高いんじや弱点部位を集中的に狙うしかない。幸運なのか、相手はエイ型のユートロイドだ真正面から叩き切っていけば、短時間で終わる可能性は十分ある。所詮相手は固定パターンに当てはめられたNPC。攻撃する前の予備動作さえ覚えてしまえば、もうこっちのもの。

そう思っている間に、ストーリーは終わっており、戦闘前のWARNING表示が出た後すぐさまチャージしておいたセイバーの攻撃を真正面からぶつけた。弱点にあたったため「ガイッ！」という効果音とともに、画面が赤くフラッシュバックした。黒いゲージは一気に4分の1ぐらい減った。

（防御力はゲキ弱だな）

ならば案外短期決戦になるだろう。案の定敵のHPは一分経たぬうちに限界のレッドゾーンに達していた。もうここからが大変。速いわパワー高いわ硬すぎるわだの本当の本当につつとおしい要素が出現するのだ。弱点を最大パワーでたたいたとしても3ドットぐらいしか減ってくれない。大体の人はここで苦戦を強いられ、ここで1落ちを食らうだろう。しかし俺から見れば単純にあがいているようにしか見えていなかった。システムという絶対力のまたその上を

行く技術力を持っている俺だからこそそう見えた。

そして、相手のゲージは残り2ドットぐらいになった。敵のパワーもスピードも最大値だろう。だがそれは所詮俺にとってはまたあがきに過ぎない。

（足掻いたって無駄さ。お前はもうすでに俺の手の中にいる。さあ、狩らせてもらおうか。お前の魂を！）

止めの一撃。弱点激突音とともに、敵ユートロイドの体が真っ二つになった。ユートロイドは最後の断末魔を叫び、爆発を起こして消滅した。

「ふう・・・」

俺はオートセーブが終わるや否や、PMPをスリープさせて、首を回した。

（これで祝6000体目更新だな）

俺は案外簡単だなと思いつつも、心の中で喜びたい気分だった。こんなことが無かったならな。

「桐ヶ谷君」すぐ横から俺の名前が呼ばれた。

「はい？」

「いいんですかあ？いつもゲームばかりしてえ、しかも授業中に。いけませんねえ？」

わざわざ先生がケチつける必要が無いだろう。迷惑なんざかけてるつもりなんかさらさら無いしな。

「テストも取れるし、運動もできますから、学校の成績モメンタに関しては無問題です。だったら別にサボろうがゲームしていようが、いいでしょう。」

「ゲームしすぎると君がかけてる眼鏡だっていつかいみなんかなくなりますよ？成績どうここの問題じゃありませんよ。まあ、そうなったときは君の自業自得、通常通り成績をつけますから」

いちいち粘っこいなあ。男のくせにな。こっぴどいのはとっとは

ぐらかすのが吉と出るな。そう思った俺は、爆弾投下準備を予測させるがごとく台詞をはいた。

「ゲームして失明するなんて、それは正しい姿勢でやらないからですよ。ましてやそんなやつはゲームどころか、汗水たらして試行錯誤して作り上げた開発者に失礼なやつですよ。それにこれは伊達眼鏡ですから、単純なアクセサリです。視力にもなんも問題ありません」

俺は大きいため息を吐いた後、原子爆弾級の爆弾発言を投下した。「とつとと授業進めてください。こんなことでいちいち口出ししていると授業は進まないし、先生の夢である『桐ヶ谷一真をなんとかしても泣かせる』とかいうものはおふざけ言ってるんのか？になっちゃいますよ。先生の夢はどうやら百光年ぐらい先になりそうだ。」

俺はわざと「やれやれ」と言うような仕草を見せた。恐らく、これがアニメならブツブツチーン！というたくさんの糸が切れる音がしただろう。それを物語るがごとく、数学教師である北丸は俺の机を乱暴に叩いた。どうやらジャストミートしてみたみたいだ。

「勉強できてスポーツできて、何でもできりやそれでいいと思ってるんのか、ああん？」

「別に、これといった問題は無いでしょう。それに、先生は俺をけなしているのではなくむしろほめているようにしか聞こえませんか？」

「ぐぬぬ・・・そこまで軽口が叩けるのなら、この難問構成の練習三十二をといてみる！」

「練習三十二？」

俺は片肘をつきながら、教科書をめくり、北丸がさす練習三十二とやらがあるページを開いた。

「ああ、これが」

その後、俺は問題文をすらすらと読み上げた。

「どうだ解けまい！授業をまともに受けてないやつがわかるはずがないだろう！」

「さあ、どうかなあ」

俺はいやらしく首をひねりながらも黒板の前に立ち短くなった白チョークを取り出し、条件成立の証明を書いた。書かれていく解答に多分北丸は愕然の表情を浮かべているだろう。こんなこととしているといふことはこういうことも連想できる

（お前の話なんか聞かなくても、わかるからいいんだよ）・・・
・みたいな？

俺は北丸の言われたとおり、練習三十二の回答をすべて書いた。そこで留まっておけばいいものを、いらんことをした。北丸の回答にケチをつけるがごとく、北丸の回答を片っ端から消し、俺流に回答を仕上げていった。

（お前なにやらかしてんだよ！！）と多分北丸含め、俺以外の全員が思っているだろう。しかし、俺は何も北丸の回答が間違っているなんてことは言っていない。証明の仕方があまりにも雑すぎるのだ。式をハシヨる。字が汚い。多分ここにいる四分の三ぐらいは単純に書き写しただけなのだろう。それをみんなが理解しやすく、そして読みやすくするように俺がわざわざ書き換えてやってるんだ。できればありがたく受け取ってほしいぐらいだ。

三分ぐらいで参考書みたいな解答を書いた俺はすぐに席に戻った。しばらくするとそこら中から「あ、そういうことか」などという声が多数出てきた。当の北丸本人と来たら、教壇の上につつ伏せていた。なんと言っただて、生徒に追い越されてしまったのだから、当たり前前か。

俺の周りからカリカリカリカリというノートにペンを走らせる音が聞こえていた。

ちょうどその音が止み終わったころには、今日最後の授業終了のチャイムがなった。

STAGE 2

放課後スタートのチャイムが鳴ってしまえばもうこっちのもの。

屋上に直行した。いつも屋上は立ち入り禁止で念入りに鉄網柵に鍵までかけてしまっていて、「生徒の立ち入りを一切禁ずる」等という看板書きまで添えられていた。しかも嚴重に4重の南京錠。しかも鍵穴がそれぞれ違う。もう本当の本当に誰のせいでこんなことになってしまったのだろうか？……………。

すみません、俺のせいです。何回も何回も鍵破りなんかやらかしているもんだからかな？何のためにピッキングの技術を覚えたのかマジでわからない。だが、所詮南京錠だ。ピッキングがやりやすくて安心する。これがもうちょいややこしい鍵型だったらどうなっていたことやら……………。

一分しないうちに四つ全部の南京錠をはずし、もう一度かけなおされないように、制服のポケットにしまいこんでから、鉄網柵のドアを開けて、そのまま屋上に入っていった。

今日は運動部は大会前のせいかいつもより気合が入っており、屋上まで掛け声が聞こえる。鬼教師が顧問する仁舞高校野球部にまごういっくにいたっては校内の階段を使って、気合入れてランニング中。何事も体力は大事だもんな。そんな気持ちをやそにもう一度PMPを起動させ、今度は違うソフトを入れなおした。今日買ったばかりのゲームのもんだから、どんなゲームかわからない。告知では「PMP史上空前の超大作！」などという宣伝板があった。

さて、今日も一狩りで行こうかとゲームをスタートさせた。攻略ダンジョンを見てみると、どうやら3Dダンジョンのようだ、周りを見渡し、視点変更しながら回避して、近接のソード、遠距離のバスター、中距離のランスでモンスターを倒していくわけだ。属に言う無双ゲームというやつだ。しかし、爽快な気にさせる点で大作な

どといわれても俺にとっては面白みの無いゲームだ。俺は「殺し神」と呼ばれるほどのキャラだ。ボスの首を刈り取るからこそ俺の真価は発揮される。無数に集まってくる敵をすべてソードでいなしてから、ボスがいるであろうステージの最深部に入った。そして、ボスがいるであろう部屋の前にあるゲートをくぐると、画面がフェードアウトをした。

「えっ!？」

本日二回目の絶句。なぜかステージの最初に戻された!？また最深部に入ると、また始発に……。

「こ、これってもしかや？」

これってもしかやバグゲーとか言うやつじゃないか? いや、再起動すれば何とかなる。俺は電源を切り、もう一度起動させた。起動させたのだ……。しかし、PMPという表示が出た瞬間画面がフリーズ。そしてブツンした。電源がなぜかおちた……。

「……………」

言葉が出ない5回目になっても同じパターンだ。俺は肩を震わせながら呻き声を上げた。

結論以前の問題だ。クソゲーの時点でアウトだ。システム以前の問題だ。俺の技術以前の問題だ。バグが相手じゃあ俺でもどうにもならない。俺はソフトを抜き出し、律儀にもケースのポケットの中にしまいこんだ。

「まったく……。ま、バグがあるならってわかったらプログラムのデバツカー出してくれるならいいけどな……。」

と頭をかきむしりながら屋上から降りた。

今日の夜。

「何じゃこりゃ……………」

俺はゲームをよそにテレビのニュース画面に釘付け状態になった。仁舞中央公園、つまり俺の家のご近所さんにある公園。あの公園は三本のチタン合金が螺旋状になっており、その上に大時計が乗っか

っているようなデザインだ。この仁舞公園、及び仁舞市のシンボルだ。

その時計台が何者かにぶった切られたらしく、切断面がとてもきれいに切られていた。

俺は、目を細めながらその画面をじっくり伺った。

(くそ、画面越しじゃあしつかり見えねえな)

俺は舌打ちをし、ため息を吐きながらソファアの背もたれにもたれかかった。明日は四十分授業だから早めに終わるはずだ。学校が終わった後ちよつと拝見させていただこうかな。最近バトゲーばかりしてて、画面見っぱなしの日々だからちよつとは目を休めてやるのかな。

そういえば夕飯をまだ取っていなかった。テーブルの上には「母さん遅くなるから勝手に作って勝手に食べといてね」などと記述されたり、最後にはハートマークのお墨付きだった。

(いったい何歳のつもりだよ・・・)

俺は苦笑いを浮かべながら、手紙をくるめてゴミ箱に投げ入れてからキッチンにあるフライパンを取り出し、何を作ろうかといつもの癖で左手で右目を隠すように顔を覆い、人差し指と中指で右半分額に触れた。

よし、今日は炒飯にでもしようかな？

「ねえ、今日一緒に帰ろうよ、一真あ・・・」

俺は、こんなこと言い出したやつ顔を見ながらわざとふてくされたような表情を浮かべた。ひじ辺りまで伸びている後ろ髪に、逆方向に出ているアホ下が二本あるような髪型をした少女。体系も女子高生にしてはいい・・・と思う。(俺じゃああんまりわかんない)こいつに名前は小野沢友里おのさわともり。言うなれば、俺の幼馴染。

「なんで？」

俺は表情一つ変えずにいった。そしてなぜか赤面を浮かべてくる

友里。

「べ、別に今日は部活も休みだから、たまにはいいかなって・・・」

友里は俺から視点をはずしながら言った。何お節介やってんだがわかかんないが、そんなこと口が裂けてもいえない。言えば逆上されて空手で鍛え上げられたメガトン級のパンチが顔面に炸裂する。生きて現世に潜在できる保障なんてどこにもあつたもんじゃない。

(ルックスは上級なものになぁ・・・。そのヒステリックさえ無ければいいんだけど・・・)

「なんか言つた?」

「いや、別に・・・」

こいつの前じゃ油断も隙もありやしない。心で思ってるだけでも感づいてくるんだからな。耳が不自由なやつには唇の動きで相手の言ってることを読み取る「読唇術」どくしんじゆつなんてことができる奴が要るけど、こいつの場合は漢字違いで「読心術」どくしんじゆつができるんだよな。ああ、怖い怖い。まるでエスパーだな。

俺は友里をスルーするがごとく、友里の横を通り過ぎた。この女は何を勘違いしたのだろうか、俺の背中を追って教室から出てきた。

「あ、一真まつてよ!」

俺は無意識下で例の公園に来ていた。友里と俺はブルーシートに覆われた被害のあつた時計台を見つめていた。

「ほんとにびつくりだね。時計台がほんとに真つ二つだなんて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ねえ、聞いている?」

友里が俺の顔を覗き込んできた。しかも距離が無駄に近い。

「ん? ああ。聞いてた」

そして、ほとんど棒読みである。

「時計台どうなつちやんうんだろっかね?」

「取り壊しなんじゃないのか?」

「へ？」

「へ？って言われても。いつまでもあんなでかい物おいて置けるわけが無いだろ？ま、取り壊して又作り直すんだろうぜ。もっともあんなでかい時計台はもう作れないだろうがな」

「なんで？」

俺は大きいため息を吐いた。

「何でもかんでも聞くな。聞いてばっかだから、お前はいつまでも運動だけの奴なんだろ？」

「なによそれ！」

ビュオツ！という音と共に、友里のパンチが炸裂した。俺は首を傾げるだけでそのパンチをかわし、それを引き戻して第二撃を加えてこないように、俺の横を通り過ぎた手の腕をつかんだ。こうなりやこつちのものだとたかをくくっていた時だった。

「一真の意地悪！」

「何が？」

「すぐに私を馬鹿にするようなことばっかり言っただけで、私が時計台どうなるって言ったとき、『直してくれればいいな』って言うてくれれば、よかつたのに！一真の馬鹿！夢なし！」

「現実リアルに夢求めた覚えはないけどな。」

俺の言葉が終わると同時に、友里は俺の手から自分の腕を引っっこ抜き、ぷいっとなげを向いた。

「一真の馬鹿・・・もう知らない！」

またもう一発パンチを放ってきたが体ごと反転させ、それもかわした。ぴんつと伸びきった腕を引っ込めて友里は泣きそうな表情を隠すように後ろを向き大股でどこかへ行った。

俺はため息を吐きながら、後頭部を掻いた。勝手にヒステリックを起こして、勝手にキレて勝手に泣きそうになって勝手にどっかへ行きやがった。しかも全部俺のせいだよ。全くなんて女なんだ。あんなのが俺の幼稚園からの幼馴染とか本当に冗談がきつい。

俺は、愚痴にも近いような心境を思ったあと、ブルーシートに覆

われた時計台のほうへ歩いて行った。

（けどな友里、俺だっこの時計台がどうなってもいいと思ったわけじゃ無いんだぜ）

俺がこの時計台に近づいた理由は、真相を確かめるためだ。こんなご近所さんでこんなことが起きていては、いつ何時、俺や友里、それか皆が被害に遭うのかもわからない。だから、早く犯人を突き止めて、警察に連れて行かないと、大変なことになる。

だが、俺はこのとき知らなかった。この事件が、すべての発端で、俺たちが住んでいる世界と全く違う世界が、重なって交錯してしまっていることを……。

STAGE 3

俺は時計台の近くに近づいた。テレビで得れる情報はとりあえず全部得た。とは言えども、テレビで得た情報はほんとに些細、と言うより無いに等しい。やはり現場に行くのが最も情報が入りやすい。俺は時計台の前に立ち、しばらく見つめていた。二分間ぐらいだっただろう、俺は一步近づき、ブルーシートを一気に引っぺがした。引っぺがした先には、あまりにも綺麗に、そして滑らかな切断面を作りながら、真つ二つに切断されたチタン合金製の柱がただ静かにそこにあつた。

俺は思わず柱の切断面に触った。

(すげえ切れ味だ。手がすべるなんて。)

あまりにも綺麗に切れていたのだ。金属を切断したときのあの独特のデコボコ感なんてどこにも無かった。俺は息を呑みながら柱の周りを三回も周回。

(柱には何もなさそうだな)

俺はため息を吐きながら。下を見下ろした。

(ん?)

俺はかがんで地面を見た時計台のすぐ下はコンクリートブロックでさせられている。普通ならあるはずの無いもの。それはえぐられた後、まるで獣の爪にでもえぐられたように、彫刻刀にでも彫られたみたいな、そんな長さが不揃いな傷跡が五本、平行になっていた。

(何だこれ?)

俺は指先でその傷跡を触ってみた。

(ッ!)

そしてあることに気づいた。

(これも綺麗過ぎる)

普通コンクリートを処理する時には、この時代ではリサイクルするのが普通だ。切断するにはダイヤモンドカッターでやるのがベタ

「だ。だが、これはそのどちらでもない。爪のようなもので、傷つけ、抉ったような感じのものだった。」

(でも、どうやって・・・)

今まで警察の捜査に加わったこともあるけど、こんな例は初めてすぎる。というより異例すぎる。手段がわからなければ、この謎を解き明かそうにも無い。

俺はしばらくめをとじて、考えにふけた後、大きく溜め息を吐き首を傾げながら目を開けた。

「クソッ、ぜんぜん分からねえ。」

そう呟きながら自分の頭をがりがり掻き毟った。そんなことやってたて何か浮かんでくるわけでもない。だが今回の事件は、まだこの一例だけしか確認されていない。だったら他の例が出てくるまで待とうか、なんて、呑気な事も言っつてられない。次の例が人かもしれない。次の例が出てくるといことは何かが被害を受けるといことだ。そんな人の不幸に対して、アリのように群がるなんてそんな俺にとってひどいことはしたくない。

(何か、何か手は無いか)

俺は考えた。

(！)

否、ある。今こういうときに最も頼りになる人物を俺は知っている。俺は自分の携帯を取り出し、その人物に電話をかけた。

「で、何の用だい？桐ヶ谷君」

俺はこの日の学校を適当にサボって、今警視庁にきていた。会議室を丸ごと借り、俺が今頼れる人物と、話をしていた。

この人は宇佐美淳二うさみじゅんじ。警察庁から配属された、警視庁第一課の警部さん。こう見えても俺はこの人に何度も協力も要請されては、事件を解決しているわけだが、今からその貸しを精算しに来たわけだ。整った目立ち顔立ちで、細身の体格をしており、俺から見たら「普通の体型」だった。キャリア組ではないらしく、ほとんど自分の

実力だけで、この地位を築いてきた……らしい。

「なに、簡単なことですよ。今までの貸しのうち、貸し一を精算しに来たんですよ」

「遠回しに言われても分からないんだが？」

「つまり協力してほしいわけですよ、宇佐美警部」

宇佐美警部は少々溜め息を吐きながら、まっすぐ俺を見据えた。

「君が協力を要請……か。」

宇佐美警部はさもおかしそうに鼻で笑った。

「何がおかしいんですか？」

「いや、珍しいこともあるもんだね。世の中には、と思ってね」

「珍しくもなんともないでしょう。一般的な高校生が警察に泣きついた。または捜査をしてくれとやってきた。別に珍しくもなるとも無い」

「君だからこそだよ。今まで僕たちだけでは迷宮入りになりかけた事件も、全部君が片付けてしまったんだから。管理官も君のような高校生なら是非、警視庁に勤めてくれといていたぞ？」

「勧誘ですか？残念ながら俺は最低でも警察になるつもりなんかありませんから」

「そうかい」

本気でがっかりされた……。気まずくにすんなよ、警部。

「それは残念だ」

「はあ……」

俺は舌打ちをしながら後頭部を掻いた。早く話を戻してやらなくては。

「いま仁舞市で起きている事件知ってますか？」

「ああ、仁舞中央公園で起きた、時計台切断事件だね？」

「前例つてあるんですか？あのタイプの」

「前例……ねえ」

警部は顎に手を当て、考え込んだ。

「あつた……」

俺は息を呑んだ

「な」

警部はうなずきながら最後の一文を言った。

「本当ですか!？」

俺は思わず、身を乗り出した。

「まあね。にしても今日は本当に珍しいね」

「？」

俺は首をかしげた。なにが珍しいのだろうか？自覚症状の無い俺には全くわからなかった。

「自覚症状なしなのかい？」

「・・・・・・」

ズバリ言い当てられた・・・・。まあ、俺の表情からして分かるだろうな。友里みたいな読心術がある訳でもないし。

「いつも君は、僕たちが事件の捜査を協力してほしいというときは、いつも君は面倒くさいだの、ゲームする時間が無いだの、文句ばかり言うのに、今回は事件に興味を盛ってくれる。こっちからしたらばんばいさいだよ。僕たち警視庁は喜んで歓迎するよ」

「・・・・ん？」

「まだ分からないかい？管理官が直々に、君を特別顧問として捜査協力を申しだそうとしたところだったんだよ。」

「・・・・・・」

しやれになんねえ！じゃあ、わざわざ学校サボってまで、ゲームする時間を減らしてまでこんなとこに足を運ぶ必要なんか無かったんじゃないか！危うく頭まで下げるところだったぞ！？危ない危ない。あやうしあやうし。だが、話は早い。とっとと捜査に協力して早く解決して・・・・。友里を安心させてやろう。

俺や、警視庁第一課は動き出した。異常現象のこの事件を解くために

STAGE 4

「これが、三週間前に撮った現場の写真だよ」

警部は俺の目の前に十二枚組の写真をおいた。どこかの公園の倉庫が写真でも分かるくらいきれいな切断面を作り真つ二つになっていた。俺はその十二枚組の写真をつかみめぐりめぐり見て行った。多分八枚目ぐらいだろうか、俺の手が止まった。というより、止まらざるを得なかった。

(この傷……)

しばらくその写真を見つめていると、警部が俺の顔を覗き込んできた。

「どうしたんだい？」

「いや、これ……」

俺はその写真を警部に見せた。警部はそれを覗き込むようにその写真を見つめた。そこにはコンクリートブロックが深く爪痕みたいに見えるれていた。

「これって……」

「ええ。これと同じものが仁舞市の公園の現場でも見れましたよ」

と俺は携帯で撮ったその証拠写真を見せた。その写真を警部は一目をし、また三週間前に撮られた証拠写真をみた。

「ホントだ。似てる、というよりそのものじゃないか……あれ？」

そこまで言うと警部は何か気づいたようだ。はっとしたような表情を浮かべ俺の顔を見た。俺自身じゃ俺の顔がどんな表情を浮かべているのか漠然としか分からないけど、多分俺の予想しているような表情だろうと思いい、その表情のまま俺は小さくうなずいた。

「じゃあ、このときからこの事件に伏線があったというのか」

「みたいです」

俺は大きいため息を吐きながら椅子にもたれかかった。

「ちよつと待てよ。これと同じようなものが。待つといて」

警部はそういい残り、俺一人を会議室に残し出て行った。多分資料室にいったんだろう。俺はまた大きいため息を吐きながらいつものあの癖をした。

多分二十分ぐらいだろう。警部はダンボールに山積みになった何かしらの資料やらファイルやらを持ってきた。もう俺はタジタジ・・・。もうがたがたして体を震わしていた。いや、怖くてじゃねえよ？その資料の多さに押されてもうガクブルなのだ。きつと間違いない！！

ダンツ！という下手したら机の木の板がバツキンと持って行かれそうなくらいの衝撃と大きな音が響いた。

「これ何すか？」

俺は表情を崩しながらその資料集に指を刺した。警部は何が意外なのかとか言う表情を浮かべながら、首をかしげた。

「なにして・・・君の言う傷跡が現場から発見された、事件ファイルだよ。見たかったろ？」

「・・・・・・・・」

見たかったよ。確かに見たかったよ。否定なんかいまさらする気なんか無いさ。数を弁えるよ。って言うより、いったいどれだけ不審な点を検査上流してきてんだよ・・・。俺はため息を吐きながら一番上のファイルを取り出し、そのページを次々とめくりとんどんページを送って行った。

（これは特といったことは無いな）

俺はファイルを脇に置き、次のファイルを取り出した。そして表紙からもう俺の手が止まった。

・日付 2007年 8月16日

・場所 神奈川県糸島町12丁目51番地

極秘

「・・・・・・・・」

言葉を失った。二〇〇七年？十年前？

「もし君がその傷跡に道を指し示すのなら、この事件の伏線はそんな前から遭ったというわけだ」

「こんな前からあって、よく誰も襲われずにすんだもんだな」

「全くだよ」

「けど、この犯人がもう物を破壊するまで始めてんだ。もしかしたらそろそろ人が襲われる可能性だってある。」

俺は左手で、右目を隠すようなあの癖をしてがんじがらめのこの考えを少しずつ解き明かしていった。

「警部・・・」

「ん？」

「もしかしたら人じゃないかも知れないかもしれませんが？」

「人の仕業じゃないとしたら、いったい何だというのだい？」

「分かりません。けど、そういうことも視野に入れておいたほうがいいでしょう」

「・・・・・・・・」

警部は完全に黙りこくった。ま、いきなりこんなこと言い出されるんだからな、無理は無いか……。ま、俺でもこんなこといきなり言い出されたら、驚くわな。いやあきれるか……。いきなり幽霊を信じなさいとかいわれているような感じだしな。こんなことができるトリックがわからない以上、もしかしたら人間じゃないかもしれないと言う可能性も少なからずあるしな。

「まあ、そんなこと少なからずあるかもしれないしね」

息合うじゃん。俺と同じ事考えているとは。

「警戒線を張るように、刑事部部长にも言っておくよ。それと、警察庁の情報統括長にもね」

「頼りになりますよ警部はほんとに」

いや、マジでだよ、ホント。この警部に相談してもらって正解だったよ。

「ま、今日はこんぐらいな。じゃ、俺帰りますわ」

「そうかい、気をつけて帰るんだよ。特に犯人には」

「相手が動物ならね」

「人間なら？」

「俺に格闘して勝てるのは警部ぐらいしか知りませんから」

STAGE 5

「と言うわけで、今日は一緒に帰るぞ」

「へ？」

友里の顔が真っ赤になった。いや、真っ赤になったのは頬だけだけど……。と言うより、何をそんなに恥ずかしがる必要なんてあるのだろうか？むしろこんなことをいきなり頼みだした俺のほうが恥ずかしいけどな。友里は動揺したように身を揺すっていた。

「で、でもいきなりなんで？」

「何でもだ。理由は聞くな」

「……………」

あれ？やらかしたのか、俺？友里は何がわけわからぬまま視線がフヨフヨあちらこちらに泳いでいた。そのあと、頬を赤くしつつも、ぷいっとなつぽを向いた。

「い、いつも私がそれと同じ事やってるときはブツブツ文句言って拳句の果てには私を置いていこうとするのに、いざ、自分が頼むとなれば私が逃げることを許さないって、都合よすぎない？」

俺はお菊ため息をはいた。

「そうか、嫌なら別にいいぞ。俺は一人でも帰れるからな」

「へ？」

俺はそのまま友里を置いていこうと、友里に背を向けそのまま立ち去ろうとした。ま、今回のことはやろうと思えば警部や、ほかの警察の方々だけでも片付けれるから、別に友里の助けなんか要らないからな。なんて事思ってたらなんで俺は友里と一緒に帰ろうなんて言い出したのか分からなくなってきた。今日もこいつなんて置いて帰ろうかな？と思った矢先だった。友里が後ろから俺のブレザーの袖口をつかんだ。俺はさもめんどくさそうに、友里のほうへ振り向いた。

「んだよ、嫌なら別にいいって」

「べべ、別に嫌なんかじゃなかったから……。私も、もし一真がそんなこと言い出さなかったら、多分私も同じこと、一真に言い出しそうだったし」

「部活は？」

「サボる」

主将が率先して部活をサボるとか……。世も末だな。自分から言い出しといてなんだけど。

そして気づけば、俺たちはあの公園に来ていた、と言うより来ざるを得なかった、俺はな。

「やつときたね」

あの時計台の現場のすぐ近くで、宇佐美警部がタバコをふかしながら待っていた。昨日待ち合わせをしたんだけどな。

「宇佐美警部！」

友里の顔がパツと明るくなった。久々の対面を喜んでいるのだから。

「友里君か。君も着ていたのかい？」

「はい、いつも父と一真がお世話になってます」

「いやいや、こつちが世話になっているぐらいだよ。で桐ヶ谷君、友里君との進展は？」

俺は本日……。何回目だっけ？大きいため息を吐いた。

「その手の話をするなら俺は帰ります。帰ってゲームしたいですから」

「そんな事いわないでくれよ……」

警部はなだめるように、苦笑いを浮かべた。警部はその後、ふうと細い息を吐きながら、タバコの火を指で握りつぶし、携帯型の灰皿に入れた。

「で、今回の用件はニュースを見たとおりだよ」

「そうですね」

ま、あれ以外に情報なんかないからな。まったくメディアは目先

の情報にしかとらわれないから、知りたい情報は一切知ることができない。

そして、こいつだ。友里はもう話に乗ることができなくなっていた。証拠に友里の頭から「？」マークのアイコンが浮かび上がっていた。・・・多分浮かんでるだろうと思う。こんなこと言い出したらきりが無い。このことに際してはまたいつか勝手に自分だけで討論しておこう。

「現場は、東京都埜杜町にある大きな屋敷だ」

「ああ、ニュースでも大騒ぎだったな。大倉庫だっけ？確か車ごともっていかれたとか言うシャレになんないこつとだったよな」

「本人知ったときは大泣きして、拳句の果てには失神して病院に搬送されたらしい」

「どぞの笑い話みたいな話だな」

「まあね。すぐに現場にむかうけど、準備いいのかい？」

「ゲームあるから大丈夫ですよ。最低でも完全に暇人になるわけでもありませんからやってないときは考えを整理してますから」

さて、後はこの愚かな少女に事情説明だな。納得してくれるかな？

「ねえ一真何がどうなってるの？」

「昨日の被害社宅に立ち寄る。俺、今回の操作の特別顧問なんだ」
「・・・」

あら？やらかしたか？またしても俺は。いや、いつもあることなんだこれは。混乱するはずがないよな。

「も、もしかして・・・」

友里の体がわなわな震えだした。

「私を協力させようとしたのね！！」

おおすごい！友里はこんなにも動が鋭いやつだったけ？俺は感嘆しつつも、友里に対して心のそこから拍手を送りたいと思う。とことん馬鹿にしている俺は最低なやつだな。

ずっと黙っている俺から悟ったのだろう。怒りの表情いっぱいになった友里は、拳を握り締めていた。ん？俺は危ないスイッチを押

してしまったのか？

「ば……ばかーーーーー！！」

両手でのパンチラッシュが炸裂した。しかもそれを全部かわされるせいで多分、友里のいらいらゲージはぶっちぎっているだろう。もう沸点を超えている。多分百発超えたぐらいだろ、友里は大きく息を切らせながら、敵意むき出しの表情を浮かべた。多分体力が回復しだいまた攻撃をしだすきだ。

「すごいねえ。さすが僕の教え子だけはあるよ」

警部は感嘆の表情で……表情はそのまま無表情だけど、感嘆のような声で言った。

「俺に警部流の截拳道を叩き入れたんでしよう？」

「まあね。君の飲み込みが早くて、僕は苦労しなくてすんだよ。今じゃ君は僕とほぼ対等なんだからね」

「一週間前に散々俺のことをボコボコにしといてよく言いますね。それに、かわす美学とか言う時点で、もう截拳道ジークンドーじゃありませんよ。もはやまったく別のものですよ」

「そんな事いわないでくれ。横鴨おうがもさんに顔合わせできないじゃないか
いか」

「横鴨つていえば、確か警察庁の官長でしょ？」

「ま、この一門を開いたのも、横鴨さんだしね。僕が教えたのがこんなの截拳道じゃないとか言い出された事が知れたら、後で横鴨さんに絞められちゃうよ」

そんな事を言いながらもへらへら笑っている時点でもうおふざけだと言うことが丸分かりだ。そんなことしている間にも、どうやら友里の体力が全快したようだ。

「一真……」

怒りの声でいっばいだ。怖ええ。

「ん？」

俺はその感情を殺しつつも、いつもの語調で言った。本心は怖くて仕方がない。友里のパンチをもろに一発顔面行くらったことがある

る俺には、こいつのパンチはトラウマそのものだ。

「いつか倒すから・・・」

ブツツと呟きながら。俺の目を見つめ続けてきた。・・・クール
ダウンしてくれよな、早く。

「んで、ついてくるか、友里？ま、お前の探索力は俺と同等ぐら
いだから、いてくれたら心強いよ。お前みたいなやつが理想だ」

「へ？」

友里の顔がまた赤くなった。あ？また熱を入れたのか、俺は？友
里は手で自分の口を押さえながら向こうへ向いてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

すげえ、三点リーダだけで一行つかったぞ？どんだけ黙るんだよ
こいつは。

「ついてくるのか？」

「・・・・・・・・・・うん」

友里は小さくうなずいた。

STAGE 6

「ごめんください」

宇佐美警部はインターホンを鳴らし、そのマイクに向かってしゃべりかけた。東京都埜村町にある大きな住宅街にある豪邸の庭が現場だということは聞いていたが、これは豪邸というよりもはやお城をイメージできる。でかすぎるだろ。建築分野では「左右対称のシンメトリー」というのだろうか、門越しから見える大きなお屋敷は右も左も、それどころか玄関前にある噴水広場も左右対称なのだ。二度目だが、ホントにでかすぎる。これだけ大きな住宅街でもめちゃくちゃ目立つ。上空から見ればもう一目瞭然だろう。

しばらくするとインターホンから野太い男の声が聞こえた。

「どちらでしょうか？」

「私は警視庁捜査一課、警部の宇佐美です。こちらのお宅に私の部下たちがお伺いしたと思うのですが？」

「ああ、そうですか。あなたが今回の捜査の警部さんですか。少々お待ちを。今すぐ門を開けますので」

その言葉の後ぶつつり切られ、まもなくだろうか「ガコンツ」という音と共に、門が開いた。これだけスケールがデカイ家だということに、自動開閉の門とまた来やがった。まあ、ここまでの豪邸なんだから、それは当たり前なのだろう。

完全に門が開ききると、宇佐美警部を前に俺と友里は広場に入っ
ていった。入ってみるとスケールの違いが身に染みて分かる。俺の
後ろではきらめく瞳で周りを見渡している友里の姿が……。遊び
に来てんじゃねえんだぞ？

俺はそんな乙女心（？）全開の友里を背に、この三人のほかの気
配を感じ取っていた。玄関先からパイプを片手に持った、あごひげ
を生やした、五十代ぐらいの男の人がわざわざ出迎えに来てくれた。

「あの人は？」

俺はすかさず警部に聞いた。

「この家の家主さんだ」

宇佐美警部は声を殺しながら、俺に告げた。その後警部はその家主さんに少し頭を下げた。友里も頭を下げ、下げないのは俺だけ。友里は俺の後頭部をつかみ無理やり俺の頭を下げさせた。怪力過ぎてもう歯が立たない。

「始めまして警部さん、私が捜査要請を出した郷野慎太郎です。」

「警視庁の宇佐美淳二です。先ほど紹介させてもらいました、この捜査の担当警部です。以後お見知りおきを」

この豪邸の家主さん、郷野と言う人は紳士の笑いを浮かべながら、パイプを吸い煙を吐いたあと、警部の背後にいる俺と友里を見た。

「その後ろにいるお二方は？」

「ああ」

警部は俺と友里を見て、笑いを浮かべた。っていうか、何も言っていなかったのかよ。

「紹介します。こちらの男の子のほうか、この捜査上で管理官が特別顧問として召集した、桐ヶ谷一真君と、その幼馴染みの小野沢友里さんです。」

郷野さんは俺の名前を聞いた瞬間だろうか、ぱあと明るい笑顔を浮かび上げ両手を大きく開いた。

「ああ、あなたがあの有名な高校生探偵として知られる、桐ヶ谷一真君でしたか。一度一目会いたかった」

ん、ん？あらかららら？俺の認識上に齟齬が発生しているのだが？俺が高校生探偵？

「警部？」

「ん？」

「誰ですか？俺が高校生探偵だ何てこと広めたのは。まさか、警部がですか？」

「誰がそんなことをすると思うんだい？君のおかあさんだよ」

「……………」

の玄関をお城の玄関そのものを見ているかのような目で辺りを見渡している友里がいた。遊びに来たんじゃないけどなあ……。

「お城みたい」

とうとう口に出しやがった。その言葉を聞き、郷野さんは後ろを振り向きにつこり笑った。

「こちらです」

郷野さんは大きなドアを開け俺たちをその先へ通した。そこには大きな庭園があり、その向こうのほうで斜めに真つ二つにされた車と大倉庫があった。その周りには七人ぐらいだろうか今回の捜査に携わる警察の人たちが調査していた。にしても、少なすぎる……。確かに今回の事件は器物損壊だけだ。いちいちこんなことに人員を割いている暇なんか無いということは分かるが、七人は少なすぎるな。

正直この人数じゃやる気がそがれる。俺はため息を吐きながらその被害の遭った倉庫に近づいた。

「聞いてくれ皆」

警部が俺より前に出た。

「今回の捜査に協力してくれる桐ヶ谷君だ。いつも世話になっていると思うけど、調査で分かったこととか、この子にも報告してやってくれ」

そう告げると警部はふうつと息を吐き、俺の肩をポンツとたたきそのまま白い手袋をつけ、調査に加わった。なんだろうなあ……。この警部の言うことはいつも無理やりつばいんだよなあ。

俺はポケットに手をつ突っ込んだまま、その倉庫に向かって歩き出した。友里は……。

「何してんだ、早く来いよ。お前を連れてきた意味がなくなるだろ？」

「わかってるって」

友里は何かあきれたようなため息を吐き、俺の後ろをついてきた。

まずは、俺の今最も気になっているものを探した。知つての通りあの「傷跡」だ。すべてのこの一連の事件がああ傷跡と何か関わりがあるのなら、たぶん、ここにもあるはずだ。

(どこだ、どこにある)

尾らはその辺りをくまなく探した。探したはずだ。しかし見つからない……。単純に俺の探察力不足なのか、この事件は一連の事件と何の関わりが無いものなのか、それは定かではない。くそ、ここは関係ないのか……。俺は諦めにも近いため息を吐いた。

「一真！」

友里が俺の名を呼んだ。友里の見た目は細い手が俺を招き寄せた。俺は立ち上がり、その方向に向かって走り向かった。

「なんだ？」

「これ……」

友里はある方向に向かって指をさした。

「んん？」

俺はその方向に向かって覗き込むような体勢で見つめた。

「なに？この傷跡。触ってみただけですごく綺麗だったんだけど」

「よくやった友里。今回はつれてきて正解だったな」

「へ？」

つながった。やっぱり今回の事件も一連の事件とつながっている。ここまでこればそういう確信もくる。同じ犯人か、またはこういうことをする上でどうしてもこういう風な傷跡みたいな跡が残ってしまうのか、または快樂犯の挑戦的なメッセージなのか、可能性としてはこれらの三つが十分にある。いや、もうひとつか。人間以外の何かの本当の爪痕なのか。

「警部！」

俺は警部を呼び寄せた。案外近くにいたためであろうか、すぐに来た。

「なんだい？」

「この傷跡、友里が見つけたみたいなんですけど」
「・・・？」

警部は無言のまま屈みこみ、その俺が指差す方にある傷跡を目を凝らしてみた。

「この傷跡は・・・あの公園のものと同じだね」

「ええ。つながりますね」

「うん」

警部は小さくうなずいた。

「と、いうわけだ」

はい、俺の無茶振りスキル発動。

「友里、今日の夜は俺とパトロールだ」

「へ？」

話を飲み込めない友里。いちいち教えてあがるのも面倒くさい。

「なんで？」

「わからないのか？犯人が夜に活動する可能性があるっていうことだ」

「根拠はあるの？」

「誰にも気づかれず、こんな派手なことをするんだ。明るい時の犯行はまずはない。だったら可能性としてはありえる時間帯は、みんなが寝静まつている深夜か、夜の間。破壊するものはでかい建造物のみ、何でそんなもの真つ二つにして、誰もおきないんだ？みたいな事が疑問になるけど、俺の推理力じゃ、ここまで限界だし、もうここは実際に犯行しているのを見つけて、犯人を突き止めようかって思ってたな」

正直、ここまでが俺の推理力が限界だということを実感するのは心にかなり来る。推理力の限界のせいで事件の核心に迫れなかったと言つことは、俺の無力が証明されるわけだからな。

だが、事件を解決する上でその悔しさなどの感情は不要に近い。言うなれば二割ぐらいで十分だ。

俺はその悔しさなんてものを顔に出さないようにして、友里に対

して意見を打ち明けた。友里はまっすぐ俺の目を見つめ続けて、しばらくすると目を閉じた。

「わかった。一真、犯人が分からなくなって切羽詰ってるって言うの分かったし、一真にも一度助けてもらった覚えがあるしね」

「・・・？」

俺が友里を助けた覚え？・・・友里が心に引きずるようなそんなことしたっけ？思い出せないし思い出す気にもなれない。だから俺はただ単に返した。

「話が早くて助かったよ。じゃあ俺の家に泊まってけよ」

「へ??？」

友里の顔がまた真っ赤に……。俺は今日で何回友里を加熱すれば気が済むんだろうな。無意識にだけど……。

「へ?じゃない。犯人は夜に犯行するって言っただろう?お前に一人で暗い深夜の夜道を歩かせるのか、俺は?俺は許すが、お前の親父さんと俺の母さんがまず許してくれないだろうな。だからパトリールした後、お前を俺の家に一晩泊めて明るくなったら帰す。」

「理屈が通んないよ!私は夜に誰かに襲われても大丈夫だから!」

「さつき言ったよな、俺は。人間じゃないかもしれないって。お前は人間以外の何か相手でも対処しきれるか?俺はできる自信ないけどな」

「それは・・・一真ができないんじゃないあ・・・」

「そうだよな。相手が人間だつて言う決定的な証拠があるのなら別にこんなこと言い出さなくても、俺一人で何とかするけど、もし人間以外のものを俺が一人で目撃して、俺がそれが犯人だ、なんて事をいいだしたら、まず証拠が無いから笑われるって言うルートが見えている。だから、俺以外にも証人が必要なんだ。つまり、お前に証人になってほしいってということだよ」

「う、うん・・・」

友里はうつむきながらうなずいた。なぜかいつも友里は俺に頼られているっていうことを自覚してしまうと赤面して俯いちゃうんだ

よな。女心はよく分からないもんだな。分かる気にもなれないけど。。。

「一真君」

警部が俺の名前を呼んだ。俺のことを名前で呼んだ。今日あった初めての珍しいことだ。

「なんですか？」

「郷野さんが機能の夜中に不思議なものを見たそうなんだ」

警部は郷野さんを指した。郷野さんは警部と俺の間に入り、そのときの状況を簡潔に説明した。

「不思議なこととは？」

最初に切り出したのは俺だけだな。

「私は日課としていつも深夜の0時ぐらいに、パイプを吹かすんですが、昨日の夜のことです。いつものようにパイプを吹かしていたときです。パイプを吹かしながら夜空を見上げてたときです。暗闇の中に赤い流星が見えたんです」

(赤い流星・・・?)

あれ？どつかで聞いたことあるような……。なんだっけ？このとんでもない既知感デジャブはなんだ？そんな既知感デジャブをよそに郷野さんは続けた。

「その流星が見えたと思ったら突然大きな物音が聞こえたんです。するとふつとした瞬間にまた赤い流星がどこかに飛んでいきました」

「そのとき、自分の家の倉庫が破壊されたと思わなかったんですか？」

これは俺の後ろにいる宇佐美警部。

「ううんあの時は暗闇ですからな、それに怖かったので、すぐに家の中に逃げ込みました」

分かるな、それは。突然の二つの赤い流星、そして突然大きな物音、これだけ恐怖の要素がそろってしまえば、逃げてしまうのも分かる。っていうより、たぶんその判断が一番賢明だ。別に悪いことじゃないな。

「なにせ、私の家の庭園にあるあの倉庫が壊されていると気づいたのは、今日の朝なんですから」

「どう思う、一真君？」

「最終の判断を下すのはあなたですよ警部。探偵に意見なんか求めるもんじゃありませんよ」

ただ、どうやら鍵を握ってしまったのは俺だけらしいな。俺の持論では既知感って言うのは大きな鍵を握っている可能性がある。誰が考えたまでもない。たぶん俺が初めてだろうな。

「警部！」

一人の捜査官が寄ってきた。

「なんだ？」

あくまでも穏やかな表情で振り返った。緒らは傍で考え込んでいた。この気になる既知感がどうしてもきになる。頭の中で引っかかる。なんだ、この気持ち悪いぐらいの既知感は。

考え込んでいるところに警部がやってきた。

「一真君、これ、なんだとおもう？」

「ん？」

おれは警部が持っているその物証をみた。

「なんだこれ？刃物ですか？」

「たぶん、あの倉庫を真っ二つにした刃物の破片だろう。切り裂くときに刃こぼれをおこしたんだろう。証拠にほら」

と警部がその刃物を持っていた手のほらを見せた。

「自分できつたんですか？」

「その通り。でもね、ちょっと刃先を手の平で触れただけなんだよ」

「……………」

触れただけできってしまうのか。っていうことはこの刃物の素材は常に振動し続けていると言う事となる。常に振動し続ける金属……………か。聞いたことがない。

俺は試しにポケットからティッシュを取り出し、四枚ぐらい抜き

取り慎重に刃物の側面に触り、片手に持ち上げた後、刃先のほうに束になったティッシュを近づけた。すると……。

「やつぱりな」

ティッシュの束に下半分が芝生の上に落ちた。振動している。しかも小さく、そして速く。

「新種の金属だな」

そう呟きにも近い声で俺は結果を口に出した。さて、そろそろこれが人間がやったのかどうかわかんなくなってきた。

これは本気で夜中のパトロールの必要がある。犯人が人間じゃないと仮定したら本当にいつ人が襲われるか分かったもんじゃない。

「一真君」

「俺にできるのはここまでのようです」

「へ？」

「ただの探偵気取りの高校生なんかが出るような場面じゃないです。後は警察に任せます」

なんて都合のいいやつなんだ、俺は。こんなところでトンスラなんて。普通は許されることじゃない。許されていいことじゃない。中途半端なんだよな傍から見れば。とめられても仕方がない。しかし、警部は唇を吊り上げ、微笑んだ。

「そうか、苦労かけたね。家まで送ってあげるよ」

「すいません」

俺は警部に頭を下げた。友里も察したのだろう証拠探察をやめて、こっちに来た。

「なに？一真。帰るの？」

「ああ、俺やお前ができることはどうやらここまでらしい。あまり入りすぎると、警察の人たちに迷惑だ。だから帰って早く寝る」

「寝る！？でも今日は……」

俺は手で友里の口元を押さえた。それ以上しゃべらなくてもいいんだ。余計なことを言い過ぎると、この弟子思いの警部はまた人員を割いて捜査を始める。確信性があまりにも薄いこんなことに、い

ちいち人員を割けなくてもいい。むしろ迷惑だ。この警部さんには迷惑をあまりかけたくはない。迷惑をかけるのはお前だけで十分なんだよ、友里。

「じゃ、言葉に甘えて送ってくださいついでに友里も」

「分かったよ」

警部は郷野さんのほうへ向き直った。

「じゃ、私はこの子達を送ってきますので。」

「ええ、分かりました。またよろしくお願いします」

「では」

警部は郷野さんに小さく頭を下げ、その場から離れ、俺と友里は警部の後を着いていった。

たった一つの確信、この刃物の破片を持って。

STAGE 6 (後書き)

無駄に長くなってしまいました。

STAGE 7

俺の横にいる友里が俺の袖口を引っ張った。

「ん？」

「なんであんなことをいいだしたの？」

「なにを？別に何もなつたる？」

「ううん。だって一真って事件が解決するまでいつもは現場から離れないじゃん。離れるときは事件を解決するときか、警部が『今日はここまでだな』って言ったときしか離れないじゃん。でも今回は自分から離れたし、事件の捜査は中途半端だし、なんか今日の一真変」

「変なのはいつものことだ。自覚してるから大丈夫だ」

身もふたもないことを言い出した俺。言葉ぐらいもう少し考えれないもんかねえ、俺は。しばらくすると、俺の家の前に着いた。

「じゃあね、桐ヶ谷君。また何か分かったら連絡するよ」

「お願いします」

俺は友里の手をつかんだ後、車のドアから出た。

「ただいま」

「あら、お帰りーちゃん」

帰ってみれば待つてましたと言うかのように、俺のお母さん、桐ヶ谷真由子が出てきた。

「……………」

さて、今日帰ったら何が始まるんだっけ？俺は頭の中で考えた。

ああ、そうだったな。このお母さんにお説教タイムだ。

「お母さんあとでリビングに集合な」

「はいはい」

あくまで、お母さんは年齢を忘れてしまいそうなぐらいの淑女の微笑みで俺に微笑みかけた。さすが、元アイドル。俺を生んだとき

はまだ二十二歳と聞いたから、たぶんお母さんの年齢はまだ四十台にも満たないだろう短銃に計算すれば、俺が十七歳だから、まだ三十九歳だな。もうアラフォーだ。そういうことを忘れてしまいそうな笑顔で俺に微笑みかけてくる。

「覚えとけよ・・・」

向こう方には俺の声が聞こえたのだろうか聞こえなかったのだろうかわからないが、たぶん聞こえないだろうと言っぐくらいの音量で、そう呟いた。警察だけじゃなく、全国中かもしれないに俺のことを「高校生探偵」だなんて変なうわさを立てたこの母親には絶対制裁を加えなければいけない。

そういう決意を胸に秘め、俺は自分の部屋に入って、疲れを取りにいった。

「ねえ警部さん」

友里は宇佐美に話しかけた。

「ん、なんだい？」

「今日から気になってたんですけど、一真ジクシンドに截拳道を教えたのって宇佐美警部なんですか？」

「まあそうなんだけど、なんで気になったんだい？」

「まあ、なんとなくなんですけど。」

「きっかけは君らしいよ。友里君」

「私？」

友里は自分のほうへ指差した。思い当たることはと言えば・・・。

(あれかな)

友里は苦笑いを浮かべながら思い浮かべた。原因はなんだったか忘れたが中学生ぐらいのときに一真の体を思いつきりぶん殴った気がする。もちろん一真は病院送り、内臓が行かれたかもしれないという。疑いが出たまでだ。・・・出ただけでなんともなかったけど。正直そうかもしれないと聞いたときは、ないて誤りまくって、精密検査の日までずっと付きつきりだったような気がする。

(あの時かあ)

正直落胆しかなかった。自分のせいで一真にさらに負担をかけることになった。もしこのとき宇佐美と一緒にじゃなかったら、頭を抱えて騒いでいただろう。だが、聞いてみる必要がある。

「警部、まさか私が一真をふっ飛ばしたからですか？」

ふっ飛ばしたと言う表現はあまりよろしくなかった！気づいたときにはもう遅かった。友里は苦虫をつぶし多様な表情を浮かべた。

「ふつとばした？」

(あちゃー)

まずっと思った友里。友里ピンチだ。どうする？宇佐美までも自分の悪印象を植え付けてしまった。

「ああ、確か聞いたことがあるな」

「!!」

(何やってんのよ、一真！)

もう愕然とした表情を浮かべた。もう終わった。今度、って言うより今日ぶん殴ってやる！

「でも彼はそんな事きにしてなかったよ？僕も聞いたときはそりゃびつくりしたけど、まあ、君は空手やってるもっぱらの格闘少女だから、ありえるかなって思ったくらいだよ」

「そう・・・なんですか」

危なかった。もう少して泥沼にはまるところだった。

「彼が僕に截拳道を教えたのが君だって言うのは、悪い意味じゃないよ。君を守りたいと言って僕に截拳道を教わりに来たんだよ」

「私を・・・守る？」

「そう、友里を守るために必要なんだって言われてね。たぶんそれが初めてなんじゃないかな。僕に頭を下げたのは、それどころか土下座したんだから」

「一真が？信じられない・・・」

「ま、あの時は僕も信じられなかったけどね。いつも協力してくれる一真君が、まあそのときは僕はまだ警部補だったかな？そんな

僕に対して土下座をしたんだよ」

「一真が・・・」

「ま、それだけ君の事を大切に思ってるって言うことじゃないのかな？」

「一真・・・」

友里の胸の奥のほうで、何かがしまるような感触があった。一真が友里を守ると意識したような事件。友里は覚えている。と言うより心当たりがある。あの事件だ。一真に聞いたらすぐに思い出してくれる。けど、一真を傷つける。それが目に見えている。

(そっか。そういうことだったんだ)

これですべての結論がついた。一真が今日なぜあんなことを言い出したのが分かった。なぜかすつきりしたように友里は大きくふつと息を吐いて座席にもたれかかった。

「だからごめくん一ちゃん」

「誰のどちら様のせいで、俺の日常が脅かされそうになっているのか分かっているのか？」

仁王立ちの俺の目の前で、母さんが手を合わせて謝った。でも表情からして一切の反省の色は無し。全く、何なんだよ、この世話のかかる母親は。俺が高校生探偵だなんて、よりよってメディアに言いふらしやがって。自分がアイドルだった、とか言う肩書きがあるからテレビ局にも顔が効くんだろうが、いくらなんでもこんなことに利用するなんてひどすぎる。俺のゲーム時間が大いに減らされるな。どうやって取り返してくれるんだろうか・・・。無い・・・。もう落胆だ。母親の強い権力の前には殺し神である俺でもかなわない。落胆以外で何があるんだ・・・。

「はあ、しょうがない。もうこのルートでこれから頑張るか」

「へ、許してくれるの？」

突然明るい表情になった。くそ、待ってましたみたいな対応だな。俺は向こうには聞こえないぐらいの小さな音で舌打ちを打った。

「許さないよ？一生。でも、気にし続けても変えられそうにも無いから、これからは高校生天才ゲーマーと、高校生探偵の二枚の肩書きで何とか生きていくよ。ま、どうせ俺が高校卒業したときにそんな肩書きは消えるからよ」

「ありがとー！一ちゃん！やっぱり優しいのね！」

「ぐあー、抱きつくな！あんた何代なんだよ！」

「永遠の十代くらい！」

「永遠の十代だと！？俺から見ればもう三十代のおばさんだよ！少女の夢見てんなあ！」

友里いい！早く来てくれえ！そんなもってこのアラフォーのおばさんを引き剥がしてくれえ！そう願った時、インターホンがなった。神の手が下りた！

「ん？だれかしら？」

俺に抱きついたままの母さんが俺から気をそらした。

（今だ！）

「どらああ！」

力強く母さんを突き飛ばして、母さんの拘束から解き放たれた。母さんはバランスを崩しながらも、何とかこらえた。とんでもないバランス能力だ。しかも突き飛ばした俺本人がバランスを崩して、転倒した。全く、父さんが帰ってこなかったら、いつもこれだけ。さて、早くインターホンぐらいに出てやるか。ま、友里だと思いがじゃ無かったら、倒産が海外から帰国してきたんだろうな。いつも帰ってくるときにでも音沙汰なしだな。

俺は玄関のドアののぞき窓から、確認した。

（友里か・・・）

俺は鍵を開けて、ドアを開けた。

「一真、服すごいことになってるよ？」

来て早々の一言がこれだ。俺は自分の惨状を理解した。伊達眼鏡はずれ、服はぐしゃぐしゃだった。俺はこの飾り物の眼鏡の位置を戻し、服を整えた。そんなところに、後ろから母さんがやってきた。

「あら、友里ちゃん。こんな遅くに何のよう？」

「悪い母さん。急だけど、今日一晩俺の家にこいつを泊めるから」

「へえ、そうなの。高校生の男女が一晩同じ屋根の元で夜を明かすなんて、一ちゃんもそんな年頃なのかしら？」

「それ以上爆弾発言繰り返すとぶっ飛ばすかもしれないぞ？」

「女に手を振るなんて、」

「最低ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何だろぅ……。格闘技女まで敵に回しちゃったみたいなんですけど。これって何っていうのかなあ、四字熟語で。四面楚歌だったけ？この女二人の気持ちがあんなにも合致しているなんて。……。ま、確かに母さんでも相手は一応女なんだし、手を上げちゃいかんよな。

「友里はえーと……。俺の隣の部屋が父さんの部屋だから、そこで寝たら？」

「まあ、そうさせてもらおうかな・・・」

友里はよそを見ながら答えた。

「風呂入っているよな？」

「何聞いてんのよ。」

友里は呆れたような表情を浮かべた。後ろで母さんが大きなため息をはいた。わざと聞こえるようにした。

「全く、一ちゃんは女心には鈍感なのね」

「・・・・・・・・？」

俺は首をかしげた。女心？おいしいのか、それ？・・・いや、言葉の意味は分かるけど、女心はいまいち分からないだよ。母さんが言いたいことは分かるんだ、一応。けど答えたら俺のせいみたいに空気が冷めちゃうから、ここは黙っておこう。それより本題だ。

「じゃあ、重いほうは俺が持つから、早く荷物置けよ。」

「へ？うん」

友里はうなずき、大きいほう（たぶん着替えとか何やら）を俺に

手渡した。重いほうつて言うか、一晩だけだから、これだけなんだけど。属に言う俺が友里の荷物を全部持ってやってる状況なんだよな。しかも大して重くない。

「ねえ、一真のお母さん」

「ん？」

一真の後ろで友里が真由子に対して耳元にささやきかけた。

「一真なんか変じゃありませんか？」

「なにが？」

「なにがって、なんだか今日はやたらに気が利くとか、なんか……」

その瞬間友里が下を向いて黙りこくった。今日の宇佐美の車の中での話しのことを思い出してしまった。よりもよってこんなときに。

「なんか？」

真由子は首をかしげた。

「なんか……」

友里は両手の人差し指の指先を合わせてそれを回した。それから全然言葉が出なくなった。言葉に詰まってしまったというのが正しいかもしれない。

「一ちゃんに何かされたの？」

「そ、そんなことありません！」

友里、全力で否定。首を大きく横に振りながら両手をあたふたさせた。

「お、おじやましーす！」

友里は、大きな声で叫ぶように言って、ガチガチの体で入っていた。真由子は後ろからそんな友里の背中を見届けその後少し考え、顔から微笑がこぼれた。

（全く、二人とも素直じゃないのね。ま、それが純愛ってやつなのかな？ま、一ちゃんはそれが何なのかは分かってないでしょうけ

ど)

小悪魔的な笑みを浮かべた後、真由子はドアを閉めた後鍵を閉めて後に続くように家の中に入った。

「はあ」

俺は大きく重たいため息を吐いた。暇つぶしのためにゲームしているわけだが、同じゲームを何回もやったて何にも面白くない。そろそろ新しいゲーム買う必要ありかな？

「ん？」

新しいコード？なんだこれ？俺のやってるゲーム「ZEXゼクロスには毎月シークレットステージコードと言う、まあパソコンで言うソフトのアップデートみたいなものかな？それが俺のPMPに送られてくるんだけどな？

「あれ？もう今月取ったよな？」

そう、俺はつい2週間前ぐらいにもうシークレットステージコードは取得してんだよ。何でだ？っていう疑問符ばかりが俺の頭の上に浮かび上がった。

（まあ、コードはステージのみって言うわけじゃないからな。シークレットウエポンか、アイテムだよな。……一応とっておくか）

俺は取得ボタンを押した後、ダウンロードキーを入力した。画面にはロードゲージと、その間の暇を打ち消させるようなBGMが流れていた。

（なんか妙におっせえな）

五分ぐらい経ったぐらいだろう、やっとBGMの停止とともにゲージがいっぱいになった。

（やっと終わったか）

その瞬間だった。

（！）

まずひとつは異変。

(！)

そして、痛み。

(！)

そして猛烈な熱さ。意識が……持っていかれそうな感じた。

(熱い……なんだ……この熱さ。腕が……左

腕……が、もって行かれそうさ。体全体も……
……やべ……)

「ずま……かずま……一真……一真！」

「う……」

俺は自分を呼ぶ声に目を覚ました。

(誰だ……誰が)

俺の目の焦点がやっと合わさった。俺の目の前には友里がマジで心配してそんな表情で俺の事を見ていた。

「ゆ、友里？」

「大丈夫、一真？」

「あ、ああ。大丈夫だ、寝てただけだから」

「そう、よかった……」

「……」

「ほら、何してんの？パトロールするって言い出したの、一真じゃない。早く行こ。」

「あ、ああ」

俺は何もかもがわからないまま起き上がった。

(なんだったんだ、あれは)

俺は千切れるような痛みを発していた左腕をさすりながらベッドから立ち上がり、飾り物の眼鏡をかけた。

STAGE 8

さすがに夜の十一時にもなると周りは静寂に包まれていた。東京都の大会にもなるとたぶん昼とあんまり変わらないだろうが、建造物だけがやたらとでかい田舎の仁舞市はLEDの明るい明かりも無ければ、車が走る音さえも無い。つまり、この平和な町の道路をともしているのは端っこにある街灯だけと言うことだ。

ま、俺にとつては暗かろうがそういうのはあんまり怖くない。人が後ろから襲ってきてても、結局返り討ちにできるわけだからな。でも、こういうときに一番困るのは……。

「友里、いい加減離れるよ。動きづらいだろうが」

「だ、だつて」

友里は俺の腕にしがみつき、目を上向かせて俺のほうを見て言った。こいつに俺の右腕を拘束されているせいで、左右のバランスがとりづらい。しかも強く俺の腕にしがみつくせいで友里の育った胸の谷間にちょうど俺の腕が入っていた。おかげで俺の心臓は激しいビートを打ち鳴らし、俺の表情にも少々赤みが出ているが、動揺の声を少しでも出せば友里に気づかれる。気づかれれば突然俺のせいにして右ストレートが炸裂する。こいつなんだよな、こういうときに一緒にいたら結構困るやつが……。

「……………」

「……………」

どっちもだんまり。これってどっちかがしゃべり始めなきゃ埒があかない。俺は大きいため息を吐き、じと目で友里のほうを見た。

「まさか、こわいのか？」

「……………」

だんまりだが、しばらくしてから俺の方にちよつと涙目で見ながら、小さくうなずいた。

「はあ」

やっぱりな。こいつ、この年になって幽霊がいやらしい。まあ、こいつの幽霊嫌いは今に始まったことじゃないけどな。たしか、小学生ぐらいだろうな。俺と一緒に遊園地のお化け屋敷に入って突然お化け役の人に腕をつかまれて、ちよつと失神しかけて（まあ、そんな時は俺も友里の叫び声を聞いてびっくりしたけど・・・）それつきり、お化けが嫌いになつたらしい。にしても・・・。

「・・・・・・・・」

ずっと黙り放しつて、かなりきまづい。シルエットだけ見ればラブの恋人同士だ。誰かが自転車で作ってきたら、それでジ・エンドだ。とんでもない視線にさらされることになる。そういうことがおきるようであれば、こいつを強引に引き剥がすまでだ。

「一真・・・」

「ん？」

「私から離れないで」

「・・・・・・・・」

「一真？」

「何があつてもか？」

「うん」

「たぶん恋人同士つて思われるぞ？」

ちよつと鎌かけてみた。

「それでもいい。とりあえず離れないで」

「・・・・・・・・」

どうしよう。完全に頼ってきてやがる。恐れていたことだ。これで終わった。ジ・エンドだ。ゲームオーバーだ。運しだいだな・・・。

どうする？どうやって友里を俺の腕から離せるんだ？こいつの幽霊嫌いは常軌を逸している。ケンカやらせれば一級品だが、幽霊とかその手の話になれば人より弱くなる。世話のかかる女だな。

「何で幽霊こわいんだ？」

「そりゃあ、どこから現れるか分からないし。触れないし、不可

「抗力だし」

「・・・・・・・・」

黙って聞いていれば。単純な話だった。つまりだ。こいつは幽霊が何かなんだか分からないから怖いんだ。何でそこにいるんだ！見たいな事や、襲ってきたらいや！とかいう類だ。つまり、こいつに幽霊の発生の原因を話してやれば、多少はマシになるだろう。

「友里、お前幽霊なんかがほんとにいると思ってるのか？」

「いるじゃん！中学のころの修学旅行のときにお墓で肝試しして出てきたじゃん！一真もすっごくびっくりしてたじゃん！」

「中学のころ？」

俺は考えをめぐらせ、中学のころの修学旅行の日まで遡った。肝試しか。そういえばそんな事もあったな。あん時は確かに結構びっくりした。

「そうだったな。そういえばそんな事もあったな」

「でしよう！」

「でも、なんで幽霊が出てくるか分かったから、いまはそんな事も無いよ」

「へ？」

「あれは、お墓だから幽霊が出ているように見えたんだよ。脳が幽霊を見せてるんだよ。」

「う・・・う、ん？」

あれ、理解不能？説明をはしより過ぎたかな？じゃあ詳しく教えてやろう。

「お前、幽霊が現れる仕組み、知ってるか？」

「幽霊が現れる仕組み？」

「ああ。言っただろ？さっき、幽霊が見えたのはお墓だからだつて」

「うん」

「あれは、もう科学的に証明されてんだよ」

「へ、そうなの？」

「まあ、知らなくてもしょうがないよな」

俺は後頭部を掻き、じと目で今もなお俺の腕にしがみついている友里のほうを見た。

「人間の脳つてのは昼の間はあるプロテクターみたいな物が取り付けてあるんだよ。それがどんなものか分かるか？」

友里は首をかしげた。

「さあ、知らない」

「答えは、『こんな時間でしかも明るいこんなときに何も出やしない』って言う、まあ思い込みに近いプロテクターだ。そのプロテクターがあるおかげで、脳は外部からの干渉を防いでいるんだ。だから、何も感じず俺たちは悠々とのんきに過ごせるわけだ」

「ふうん。で、それが幽霊とどう関係あるの？」

「それは今から話すよ」

俺は呆れ顔で言った。先走るな、友里。

「さつき言ったプロテクターは、夜になると外れちまうんだ。昼とは真逆の思想が出てくるんだ。昼が何も出ないとすれば、夜は『どこか何か出てくるかもしれない』って言うな考えが出てきて、プロテクターが外れちまうんだ。つまり、ある環境によって不安感が発生したら、それだけでプロテクターが外れちまうってわけだな。その環境つてというのが暗闇なんだ。

でも、それだけじゃだめだよな」

「？なんで？プロテクターさえ外れれば」

「外れただけじゃん。何もされてないよ。今まで言ってたプロテクターは比喻だ。本当は思い込みだつて言ったはずだが？」

「そうだったっけ？」

「・・・・・・・・」

話すのも億劫になってきた。こいつ、左から入って右から抜けてやがる。でも続けなきゃメガトンパンチが炸裂する。

「ま、そこで登場するのが俺やお前がよくお墓で見えるお化けの登場だ」

「ブルッ」

こいつ、「お化け」って言う単語で震えやがった。どんだけ苦手なんだよ。

「夜の墓地ではよくお化けとか見かけるよな？でも、さっきも言ったとおり、それは脳が見せているんだ。つまり幻、幻覚だ。でも、単純にプロテクターが外れただけじゃ何も見えないっていったよな。そこで登場するのが『墓石』だ」

「墓石？」

友里は首をかしげた。

「墓石って言うのは、だいたいほとんどが火成岩でできているんだ。中学のころ習ったあれだよ」

「火成岩で？」

「ああ。ほかにも深成岩とか、ほかの火山岩でも作られてるんだ。それで、それらには石よりも多い、でも並の人間じゃ感じる事ができないぐらいの不特定周波数の電磁波が常に発生しているんだ。火山灰と同じだな。その電磁波がから空きになった脳に干渉して頭の中をごちゃごちゃにしているんだ。頭の中も電磁波が走ってるんだから、いきなりそんなところに訳の分からない電磁波がやってきたら、そりゃあ脳は混乱するわな。お前だって試合しているとこるに俺のとび蹴りが横から飛んできたらびっくりだろ？それと一緒にさ」

「ああ、そっか。そういうことか」

「わかったか？」

「うん。つまり脳がお墓の石から出てくる電磁波に刺激されて、視覚情報がこんがらがっちゃうのね。そして、見えもしないものが見えたりとか起きちゃうって訳ね」

「大雑把に言えばな。ほかにも、体の疲労によって見えてしまうことや、極度の緊張状態から開放された後、単調な視覚情報の入る場所に一定時間居座り続けると、催眠状態に陥って、幻覚を見やすくなるんだ。たしか、ハイヒュープノシス（高速道路催眠現象）っ

て言われたんだっけ？」

これで納得してくれてくれればほんとに助かる。これでこの手が離れてくれれば……。しかし、予想に反して友里はいまだに俺の腕から離れない。あれ？なんでだ？

「一真……」

「ん？」

「つまり、不可抗力なのは変わらないわけでしょう？結局怖いんじゃない！全然変わんないわよ！」

「……」

友里がもつと強く俺の腕を抱えてきた。もはや痛さでしかない。どうするんだよ。この困ったオーバーな幽霊嫌いの少女は。引き剥がす方法が無いな。もうここは運任せみたいだ。運良くゲームオーバーにならないことを願おう。もうこのルートしかない。

俺は落胆の感情とともに空を見上げた。

「……！」

赤い流星だ。郷野さんが言った赤い流星だ。たぶんそうだ。二つの赤い流星が平行に同じ方向に向かって飛んでいる。

「追うぞ、友里！」

俺は友里の胸から無理やり腕を引き剥がし、友里の腕をつかんで走り出した。

「へ、へ！？」

友里はどうやら見てないようだが、説明は後だ。あの赤い流星を追うのが先決だ。じゃなきゃこんな夜道をパトロールしている意味が無い。なんとしてもこの事件の犯人をこの目で見なければ。あの赤い流星が落ちた場所がいつも犯行現場だと言う可能性がある。ある可能性はしらみつぶしに調べてみよう。今はそれしかない。それしか手が見えない。もし、あの赤い流星が落ちた場所がちょうど次の現場で、しかも爪あとが見えたのなら、共通性が出てきて、この立証が確実になる。だから俺も友里も走り続ける。確かな立証を得るために。

「はあはあ……」

「はあ……はあ……一真、なんで？」

「くそ、ここだと思っただけど」

俺は焦燥感に刈られながら、あたりをくまなく見渡した。くそ、見失ったか。俺は舌打ちをした。まるでゲームで今まで戦ってきたボスに負けてしまったとか言うそういう屈辱的な気分だ。嫌気が差す。

「一真……」

「ああ？」

「なんで、そこまでこの事件に首を突っ込むの？」

「悪いか？」

「ううん。一真が、まるで本当に高校生探偵みたいに見える」

「……俺は『名探偵コナン』の工藤新一みたいに熱血漢でもなければ、ホームズみたいにあんなずば抜けた推理力があるわけでもない。俺はただ、ある可能性をしらみつぶしに調べまくって一つの真実をつかんできただけなんだ。それに……」

「それに？」

俺は地面にぺたんと座り込んで、友里も俺の隣に座った。お互い、全然息が整わない。俺は切れ切れの息を吐きながら言葉をつむぎ合わせた。

「なんだかな、あの時計台が、ぶった切られたこと自体が、あんまり許せないみたいだ。お前とよく遊んだからかなあ。よくよく思えばお前との思い出がたくさんあったんだよ。」

「へ？」

友里は俺から視線をはずして……表情が暗くてよく見えない。

友里の胸が締め付けられるような感じだった。一真が、そんな事を胸に抱きながら、この事件の犯人を追っていたなんて。この世間じゃなく、自分のために。自分のためだけじゃなく、友里のために。

そんな気持ちに友里は思わず頬を赤くして、笑みを浮かべた。

(そっか、やっとわかった)

「一真」

「・・・ああ？」

友里は一真の地面についている手の甲の上に自分の手を重ねた。

「頑張つてね。一真は、私にとって本当の高校生天才ゲームだし、本物の高校生探偵だから、どんな謎がきても一真なら解ける」

「友里・・・」

あれ？何だ？俺と友里がなんだかくさくなってきた。俺でも無意識のうちに友里の俺の目を見てくる潤んだ目を俺も見つめ返していた。傍から見ればもうホントのホントのラブラブカップルだ。

どうする？何なんだよ、このルートは！誰が予想する？たった二つしかない分岐点に突然三つ目の分岐点が現れてそこに足を踏み入れたようなものだ。一生森から抜けられないパターンだ！

誰か救いの手を！いや、誰も来るなあ！

そんな事を思っているとところだった。俺の携帯が着信音が鳴り響いた。ナイスタイミング！俺は友里から視線をはずし、携帯に出た。

「もしもし」

「桐ヶ谷君かい」

電話の主は宇佐美警部だった。声から焦燥しきってるのが分かった。

「どうしたんですか、警部？」

「大変だ、桐ヶ谷君。さっき郷野さんが函三谷町はこみやまのちで右肩から斜めに切りつけられて、遺体で発見されたようだ！」

「ッ！」

動いた。ついに、この事件の真核が、動いた。函三谷町と言えば俺と友里が一緒に今いるところだ。

「今俺たちはその函三谷町にいます。こちらから向かいます」
「そうかい」

電話音の奥でなんかゴオーと言う音が聞こえる。なんだ、この音。これは・・・エンジンか？

「どこにいるんですか？もう出勤してるんですか？」

『まあね。今君の携帯をGPSで追ってる』

「GPS・・・？何で俺の家に向かわないんですか？」

『そんなの決まってるだろ？僕の車の中のことを覚えてるか？君は友里君の手の中にメモ用紙を手渡したところを、ミラー越しでしっかり見ていたよ。僕の推理が正しければ、友里君を証人に仕立て上げるためだろう。その証人とは、犯人の姿。君はあの警視庁の会議室の中で僕と二人つきりのときにこう言ったじゃないか。』

もしかしたら人じゃないかも知れないかもしれませんが？
そつえばそんな事をいった気がする。

『で、君の性格、さっき僕が行った君が友里君に手渡した手紙から連想する、手紙の内容は、』

今日の夜パトロールするからお前もついて来い。今日の深夜俺の家に集合。

「当たり前です。まさかそこまで悟られるとは」

『ま、伊達に十八年間警察やってないよ。ちよつと頭をひねればいいだけさ。截拳道の試合するより簡単さ。じゃ、これ以上電話しながら運転するのはきついから、そこで待つといて。君がいる地点と現場の地点はあまりにも遠いから。君と友里君を拾うから』

その瞬間切れた。俺は携帯を持っているほうの手をぶらんと下げた。友里は俺の方を見上げた。

「どうしたの？」

「郷野さんが・・・殺された」

「・・・へ？」

俺は大きな音の舌打ちをして、自分の携帯を握りつぶすかもしれないと言つぐらいの握力で俺は自分の携帯を力の限り握った。

（くそ！証拠をもってそうなやつは片っ端から殺していくってことか！）

そうすると、友里をこのまま連れて行くわけには行かなくなった。もし、友里がこの事件の何かしらの手がかりをつかんでしまったら、たぶん友里は襲われる。俺から誘ったくせに俺から引き離そうとするのはしゃくだが、友里は、守らなくちゃ行けない。

「友里、この捜査から抜けてくれ。俺から誘ったくせにしゃくだけど、抜けてくれ」

「へ、なんで？なんで？一真の力になれたんでしょ、私。やつぱりいちや邪魔だった？それとも、私がこれ以上かかわったら犯人に襲われるかもしれないから？それじゃあ一真だつて一緒じゃない！」

友里は俺のほうへズイズイと寄ってきた。

「私も一真の力になれる。一真が危険な場所にいるのに私だけ外から静観なんかできない！私も一真と一緒にいく！私だつてこの事件のこと知っちゃったんだから」

とつとつ駄々こねてきた。少なくともこつこつというパターンは予測していた。こいつの正義感の強い性格を考えればこつこつということも言い出すし、鋭い洞察力で俺の考えることも分かるはずだ。分かっていたさ。そんな時の為にどう友里に返すかと言う台詞も考えていた。考えていたが、言葉が出てきてくれない。俺の考えた台詞が、俺の口から出てきてくれない。

「はあ」

俺は呆れたようなため息を吐いた。俺に対して呆れたからため息が出た。どうやら、根底では俺にとってここは友里の自由にさせたいらしい。友里を、戦力と含んでしまっているらしい。とんだ失態だな。

「勝手にしろよ」

その言葉と共に友里の顔が輝いた。

「ただし、」

「.....」

「お前が危ないと俺が判断したら、俺が直接警部に申しだして、お前を捜査から外す。これはお前のためでもあるし、俺の為でもあ

る。わかったな」

「うん」

友里は目の色を変えてうなずいた。その目だよ。その目が、俺と今一緒にいるにふさわしい目だ。その決意した目を忘れるな、友里。

この事件を解いてやる。事件と言うこの真つ赤な糸を、とき解いてやる。

さあ、狩らせてもらおうか、この謎の真実を……。

STAGE 8 (後書き)

— 真の説明間違ってるかもしれないな・・・

STAGE 9

現場はものも言えないぐらい悲惨な場所だった。俺や友里の目の前では郷野さんがジャージ姿で右肩から大きく刀かなんかで斜めに湾曲を描きながら大きく切り裂かれていた。友里には、ちょっときついかもな。俺はそう思いながら友里のほうへ向いてみると。俺にも予想にも反していて、友里は郷野さんの遺体から目を離していなかった。いま目の前の現状を受け入れようとしているのだろう。そりゃそうか。今日の昼ぐらいでは普通にしゃべってた人が、こんなところで遺体になってんだからな。受け入れるには時間がかかるだろうな。

宇佐美警部が俺たちの背後から現れた。

「どうだい、桐ヶ谷君。何か分かるかい？」

「もう少し近くで見たい。じゃなきゃはつきりとは分からない」

「そうかい」

警部が部下にアイコンタクトを取った。たぶん、通せという意思表示だろう。それを読み取った部下は俺に道を譲るように道をよけてくれた。

「一真」

友里が俺を背から呼ぶ声が聞こえたが、それだけだった。どうやら警部の部下にさえぎられてしまったらしい。

「一真・・・」

「通してくれませんか」

俺は振り向いていった。友里は驚いた顔を浮かべた。ま、そうだろうな。普段の俺じゃないよな。いつもの俺じゃ「待つとけよ」とか言ってるよな。でも、今回はかしはそんなことをすれば、友里のせつかくの決意が台無しだ。あの目をした友里なら、もしかしたら俺に真実の道を教えてくれる、道標になるかもしれない。

警部の部下たちは俺の意外な言葉に戸惑いの表情を見せながらも、

何かしら手があるのだろうと思ったのだろう。すんなり友里を通してくれた。

友里は其の部下たちを脇目に通って俺によってきた。

「一真・・・」

「今日の昼言っただろ。お前の協力が必要だ。この謎の真実をつかむにはな」

俺はため息を吐きながらキザな台詞をはいた。ちよつと新一の真似してみた。そうだな、友里の言うとおりだ。俺も、根底のほうは新一と同じなんだよな。まったく、今回の事件で俺はおかしくなっちゃまったのか？何でもかんでも認めすぎなんだよ。

そう、この事件が爪痕によってつながっていることはもう知つての通りだ。この事件の犯人が、もし、人間であるのなら、今回はかりは爪痕を残さないと予測ができる。わざわざ自分の罪を大きくしたというメッセージを出すことはまず無い。なんたって、この快樂連続器物損壊事件を成立させるには、自分は人を殺さないという事を警察たちに思わせる必要がある。

だが、これが人間ではなく、何か得体の知れないほかの存在だということだということ想定するなら、いままで物を壊し続けている犯人が、たまたま今回は人を襲い、たまたまそれがこの事件の重要な手がかり、つまり二つの赤い流星をみたという郷野さんを殺した、と言つことが想定される。

そう、だからちよつとだけ恐怖を感じた。なぜなら、郷野さんの体から三メートルぐらい離れた距離だろう。そこに、あの例の爪痕があつた。

「まさ、か、な」

俺は苦笑いを浮かべた。もし、俺の立証が正しいということになつてしまえば、真正正銘のジ・エンドだ。いや、まだそれを否定する、決定的な切り札、証拠があるはずだ。探すんだ、その証拠を。

「一真！」

友里の呼ぶ声が聞こえた。俺はその声を聞いて友里のほうへ走り向かった。

「なんだ？」

「これ、」

俺は友里の指差す方向を見た。そこには郷野さんの遺体。いや、友里の指差している方向はそこじゃない。友里の指差しているのは郷野さんの腕にある深くえぐられたような傷跡だ。

「これって、爪痕じゃない？動物の・・・」

「・・・・・・・・」

俺は静かにその傷跡を見た。そして俺は心のそこで終わったと思っただ。どうやら、俺が追い求めていたジョーカーはわずか数秒にて風変わりして、俺の恐れていたことを100%立証してしまう証拠アルビノジョーカーになってしまった。俺は、天を仰ぎ頭を抑えながら大きくため息を吐いた。仮想ゲームならばこういう展開が一番面白いのだが、現実リアルで起こってしまうと、とんでもない不幸だ。

「一、真？」

友里が俺のほうへためらいながら首を傾けながら俺の名前を呼びかけた。

「ああ、もう何も調べなくてもいい」

「へ？」

友里は驚愕の表情を浮かべ俺の顔を見上げた。その後怒りの顔浮かべて、俺のほうへ歩み寄った。

「なによ！一真のバカ！大バカ！この謎が解けないからって、逃げ出すの！？」

「何ふ抜けたことを言ってたんだ？」

「・・・・・・・・」

友里は怒りの顔から一変。疑問の顔を浮かべて、また首をかしげた。

「もうこの謎は俺の手の中だ。だが、この謎の魂、真核をひつとらせるには、どうやら並の人間じゃ非力みたいだぜ。もう専門家だ

よりかな？いや、この動物を専門としている奴らいるかどうかだな」
「どういう意味？」

「郷野さんが言った赤い流星、あの言葉に何か引つかかったんだよ。とんでもない既知感デジャブだけだな。それが、お前が見せてくれた、この郷野さんの体についた大きな抉り跡、そして、現場にいつも残っている、コンクリートでも綺麗に抉る爪痕、そして、常に振動し続ける存在するはずも無い金属でできた刃。やっと分かったよ。何もかもがつながる。だが、あまりにも馬鹿らしすぎるな。俺でもこの確かな立証を否定したくなる」

「だから何なのよ！一真がつかんだ真実は」

「だからさ……」

「……」

友里は俺の語る真実を待つかのよう仁ズイズイよって来る。余計にやりづらい。俺はためらいがちな表情を浮かべ、後頭部をかきながら言った。

「犯人は、【アステス・フェンリル】だよ。ZEXアドベンチャーゼクロスの最初のボス」

「……」

「ほらな、馬鹿らしいだろ？でもあまりにも揃いすぎなんだよ。状況が語ってしまっているんだ。現実リアルで無理ならば仮想ゲームの奴らにやらせろって言うことだな。あまりにも馬鹿馬鹿しい結論だ、友里！」

「ひゃ、ひゃい！」

俺が突然大きな声で友里の名前を呼んだせいで、友里はびつくりして声が裏返って、拳句の果てにはあんまり舌の回らない状態で返事を返した。

「俺の辿り着いた変な真実を否定するぞ！なんとしてもこの真実を潰すことのできるジョーカーを探すんだ！こんな真実じゃあ、誰も信じてもらえないわけが無い！他人が信じてもらえるような真実を探すんだ！」

「う、うん」

友里は頷き俺と共に郷野さんの周りを何かしら探すようにしたが、
こんだけ探しても何も出てこない。あるのは郷野さんに腕に残って
いる無残な抉り傷がこの事件のすべては現実リアルの者がしていない、と
言う避けられない真実のみであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1437x/>

アリアドネの糸 【交錯】

2011年10月20日01時03分発行